

東京都渋谷公園通りギャラリー

交流プログラム「渋谷ラジオ」

令和5年度番組「ふたたび交わるおどろき」

ゲスト2: 家成俊勝さんをお招きした回のうち、#5のテキストです。

【「渋谷ラジオ」「ふたたび交わるおどろき」とは】

○佐藤真実子 皆さん、こんにちは。

東京都渋谷公園通りギャラリーでは、音声コンテンツを配信するプログラム「渋谷ラジオ」をお送りしています。このプログラムは、ギャラリーの学芸員が気になるテーマを設定し、作家や専門家に限らず、様々な人をゲストに招き、生の声を伝えます。

令和5年度は「ふたたび交わるおどろき」と題した番組をお届けしています。2020年に開館後、新型コロナウイルスに翻弄され、共に歩んだと言えるギャラリーですが、まずはそのスタート地点であるグランドオープン記念事業の展覧会「あしたのおどろき」に関わってくださった皆さんをゲストに迎えて、この3年間の歩みを一緒に振り返ります。また、番組では、ゲストがギャラリーの今と交差するべく、開催中の展覧会について、それぞれの視点での感想を伺います。時間を経てふたたび交わるからこそ出会う新しいおどろきを声に乗せてお届けします。

当館の愛称とも言える「渋谷ギャラ」と「ラジオ」を組み合わせた「渋谷ラジオ」、ぜひ気軽にお楽しみください。

【ゲスト 家成俊勝さんの自己紹介: dot architectsについて】

○佐藤 今年度の番組「ふたたび交わるおどろき」のナビゲーターを務めるのは、私、東京都渋谷公園通りギャラリー学芸員の佐藤真実子です。

そして、二人目のゲストは、建築家ユニットdot architectsの共同代表であり、京都芸術大学教授の家成俊勝さんです。家成さん、よろしくお願いします。

○家成俊勝 はい、こんにちは。家成です。私は、大阪でdot architectsという建築設計事務所を、今メンバーは私以外に7人おりました、計8人でやっております。もう一つは、京都芸術大学の空間演出デザイン学科というところで教員もしております、その設計事務所と大学の両方をやっているというところなんです。

うちの事務所の拠点は、コーポ北加賀屋という廃屋の工場を2009年に借りまして、そこからメンバーをいろいろ集めて、今7チームでシェアして使っているということで、例えば元dot architectsの

メンバーの人がいたり、あるいはremoというNPOの団体で、「記録と表現とメディアのための組織」というチームがいたり、この夏からcontact Gonzoというアーティストも入ってきたり、ほかは木工所とか、映像の制作とか編集とかをしている小西小多郎さんとか、あとはFabLab Kitakagayaというデジファブもあつたりということで、いろんなメンバーと一緒にシェアしながら使っている場所になります。

○佐藤 私も、後でお話する「あしたのおどろき」のときとかは、最初に伺わせていただいて、ちょっと驚いたというか。(笑) 建築事務所さんというイメージよりも、大工さんの事務所なのかなという印象もあつた感じで、いろんな人たちが、そのときもそうですけど、新たにお仲間が増えたということですね。

○家成 そうですね。

○佐藤 じゃあ、2009年からということは、14年とか。

○家成 今14年目が始まって半年ぐらいという感じですね。

○佐藤 そうですか。そういうふうになんか集まって、協働というか、何か関わったりもしながら、活動もされたりとかはしていますか。

○家成 ええ、そうですね。例えばremoがやっている研究会、地域研究とか、そういうものと一緒に参加させてもらって、何というんでしょうか、いろいろ資料を読んだりとか、あるいはcontact Gonzoとは一緒に作品づくりをしたりもしていますし、小西さんと展示を一緒につくったりとか、キッチンをその木工所さんに造ってもらったりとか、もうあらゆる人とスタジオ内でコラボレーションして、いろいろふだんからものづくりをやっているという感じです。

○佐藤 やっていらっしゃることは、もしかしたら見た目からはちょっと異なる分野かなと思われることかもしれないですけど、結構その目指すところとかコンセプトとかだったりが重なり合うところもあって、いろいろ生み出されているということですか。

○家成 そうですね。はい。

○佐藤 このコーポ北加賀屋の造りというのは、また後半で聞くお話にも少し関わってくるのかなと思います。

○家成 はい。

【ゲスト 家成俊勝さんの自己紹介:大学でのお仕事について】

○佐藤 それで、大学の先生でもあって、その両立というのは結構大変ですね。

○家成 そうですね。大学もいろいろ忙しいというのもあって、大体半分半分ぐらいの割合で事務

所と大学を行ったり来たりしているんですけど、大学は大学でやっぱり若い学生たちの作品がすごく面白いので。

うちの空間演出デザイン学科というところは、一応空間演出とはついているんですけど、一応というか、社会課題をデザイン力で解決しようみたいな学科でして、アウトプットが本当に多様なんですね。食の人もいれば、もちろん空間の人もいるし、それから民話をテーマにする人もいるし、あるいはお花の農家に通って、それで染色する人とかもいるし、あるいは蜜蜂をテーマにしている人もいるし、本当に多様なんです。だから、僕ら教員も学生と同じように勉強して、やっていくというので、いつも教えるというより共に学んでいる感じで、すごく面白いですね。

○佐藤 そうなんですね。私は学科のお名前だけで印象を持っていたので、やっぱり空間というか、建築に近い勉強だけなのかしらと思っていたんですけど、全然違うんですね。

○家成 全然違うんです。カリキュラムも、空間のことももちろんやるんですけど、もうちょっと地域に入っていったものづくりをしたりとか、いろんなリサーチをやったり、あるいはもうちょっと頭を柔らかくするような造形とか、そういったことも学びますし、あとはグラフィックとかもやるので、本当に空間のデザインとビジュアル表現のデザイン、それからソーシャルデザインみたいなところの領域を横断しながら4年間かけて学んでいくというので、実際に学生は、本当に4年生はみんなフィールドに出て行って、いろんな農家さんや町場の人と交流しながらものをつくっていく感じですよ。ある意味で、架空のものというより、すごく実践的なもの、経験というものを学生が重ねているかなと思います。

○佐藤 そのお話ももっと深く聞いていきたいところですが、まだ始まったばかりなので、先に進んでおいたほうがいいかもしれない。(笑)

○家成 (笑) そうですね。もちろん、そうしましょう。

○佐藤 でも、いろんな方面でご活躍されているというのが分かる自己紹介だったと思います。

○家成 ありがとうございます。

○佐藤 緊張は解けましたか。どうですか。(笑)

○家成 (笑) 全然大丈夫です。

○佐藤 していない。(笑) 私はやっと緊張が解けたかもしれない。

○家成 そうですか。(笑)

○佐藤 今日は、実は収録している日がハロウインの10月31日なので、外がどうなのかしらと思いつつ、でも、今のところ大丈夫そうですね。

○家成 そうですね、大分恐れていたんですけど。(笑)

○佐藤 そうですね。(笑) 私も、とんだ日にお呼びしてしまったと思って、ちょっと反省したんですけれども。今のところ大丈夫ですが、何か突発的に音が入っても、それはハロウインの音だということで、聞いている皆さんにはそう思っていたきたいなと思います。

【大きなテーマ:ふりかえる】

○佐藤 それで、このトーク、今年の番組の「ふたたび交わるおどろき」の大きなテーマというのが「ふりかえる」ということなんですね。これは、私が設定したわけなんですけれども、最初の説明でもお伝えしたとおり、この東京都渋谷公園通りギャラリーのグランドオープンの記念事業の展覧会、いわゆる開館展が「あしたのおどろき」で、それを軸としていまして、家成さんにはというか、dot architectsの皆さんには、この展覧会の会場構成、空間デザインをお願いして、その設計者として関わっていただいた、そういった貴重な関係者のお一人であるので、その家成さんと一緒に、「あしたのおどろき」のこととか、あるいはコロナ禍のこの3年間のことを中心に、いろんなことをふりかえるというのがこの回の目的であります。

○家成 はい。

○佐藤 それで、家成さんとは、覚えていらっしゃるかはあれなんですけど、また後で説明するんですけど、「あしたのおどろき」がちょっと不本意な終わり方をしてしまったので、またリターンズのようなものをできたらいいねみたいなことも……(笑)

○家成 そういえば、そういうこともありましたね。(笑)

○佐藤 なので、ちょっと別な形ですけど、かなったかなと思っていますし、その渦中というか、大変な時期とか、そのときにはふりかえるというのはなかなかできないし、時間がたってふりかえるからこそ、そのときのことが別の見え方で見えたりとかということもあると思うんです。なので、今の時期が、割とギャラリーも、そしてdot architectsさんも、いろいろまた変化もあって、いろんなお話ができるかなと思うので、それを期待しております。

○家成 はい。

【ギャラリーの今と交わる:「アール・ブリュット2023巡回展ディア ストーリーズ ものがたり、かたりあう」をみて】

○佐藤 それで、本当はすぐに過去に向かいたいところなんですけれども、ギャラリーの今と交わっていただくべく、現在開催中の、今は「アール・ブリュット2023巡回展 ディア ストーリーズ ものがたり、かたりあう」という展覧会をやっておりまして、それを見た振り返りというのを家成さんとお

話していきたいと思っています。

○家成 はい。

○佐藤 この展覧会は、私の上司に当たる人が企画した展覧会で、私も一緒に担当に入っています。東京都と東京都渋谷公園通りギャラリーが主催となっている展覧会で、都内の3会場を巡回します。ギャラリーの事業の中でも、この巡回展というのは、少し特別な存在なんですね。なので、会場は、今回、非常に棒がいっぱい見えるような、にぎやかな雰囲気になっていましたけれども、ご覧いただいていたかがでしたでしょうか。

【dot architectsにお願いした会場構成】

○家成 何ていうんでしょうか、自分たちで設計しておいて言うのもあれなんですけど、なかなかいい感じに展示できているのではないかなと思います。

今回はやっぱり、3会場を巡回していくというのがベースにあったので、大体1つの場所で展示するとなったら、その場所に合うように展示構成を考えていくというのが普通だと思うんですけど、今回、性格の違う3つの会場ということで、持ち運びがしやすく、かつ、どこに行っても同じような雰囲気が出るような展示空間というものをどうやったらつくれるかなということを、事務所のメンバーで話し合いながら考えていました。

○佐藤 ちょっと言うのを忘れてしまったんですが、この巡回展もdot architectsさんをお願いしたんですよね。

○家成 はい、ありがとうございます。

○佐藤 私がそれを言うのを忘れてしまって。ごめんなさい。(笑)

○家成 (笑) いえいえ、とんでもない。

○佐藤 (笑) 自然な流れで。

ということで、「あしたのおどろき」に続いて2回目をお頼みしたと。やっぱりそういった特別な存在なので、ちょっと祝祭性というか特別感を出したりとか、3会場を回るのも、各会場の方に楽しんでいただけるような工夫ということで、そういった空間デザインをお願いできるのは、やはりdot architectsさんかなと思ってお頼みしたわけです。

○家成 ありがとうございます。

【テーマは「はしご」】

○佐藤 やっぱり3会場を回るということで、効率的にというか、使い回せるというんですか、それが

別の意味での一番重要なところで、それを考えていたわけですがけれども、何か作品とのマッチングというか、それは実物をご覧になるとまた違うというか、図面とかではあまり分からないところかなと思うんですけど、それに関してはいかがですか。

○家成 今回「はしご」が一つのテーマでつくっているんですけど、日常でこのはしごというのはいろんな形で利用されていて、もともとは人が高いところに上ったり、高いところから下りるための道具でもあるんですけど、時にはタオルをかけて干したりとか、脚立の上にカメラを置いて写真を撮ったりとか、引っかけたり置いたり、あるいは、時にはブルーシートの上におもとして置いたりとか、本当にはしごの形というのはすごくシンプルだからこそ、いろんな使い方をイメージできるなというのと、あとはやっぱり人間の視点の縦方向の移動というのは、垂直に上っていく感じがすごく面白いなとずっと思っていたということもあって、それでそういう何か上っていくような感覚とか、作品がはしごに引っかかってあるということ。

それから、通常、展示というと、壁に作品が来るので、壁の向こうがどうなっているかとかはあまり見えないわけですが、今回、はしごで構成しているので、作品の向こう、はしご越しに向こうの作品も見えてくるみたいな形で、すごく視線の抜けがいい構成になっているかなと思っていて、それが、このギャラリーの抜け感というか、ギャラリーを交に区切らないものができたかなと思います。

○佐藤 そうなんですよ。ラジオなので、会場の様子をできるだけ言葉で説明もしておこうかなと思うんですけど、今回の会場構成というのは、基本的に棒状の、木の棒であったりとか、またちよつと違う形の木であったりとか、でも線で組まれているという印象が割と強い。ですので、展覧会でよくイメージする空間というのは、壁が立っていて、そこに作品がかかっているとかというイメージがあると思うんですけど、それがほとんどないという。それがすごく大きな特徴かなと思います。

でも、やっぱり抜け感がある分、空間としては少し、人とかのいろんな気配が分かりすぎて、最初はどうなるのかなとちょっと思っていたところもあるんですけど、実際にできしてみると、やはりdot architectsさんのいつもの、会場構成で大切にしてくださっているところなんですけど、作品を見る空間というか、人が入って見るときに、作品にちゃんと集中できるという空間は守られているというのを、自分で巡ってみてすごく思ったんですね。

○家成 ありがとうございます。

○佐藤 でも、それと同時に、向こうの作品だとか、人とか、人の足とか、普通、人の足の気配というのは、あまりいい印象ではないときもあるんですけど、それが何かいい雰囲気を感じられるという空間になっていると思ったんです。

○家成 何か普通の白い壁に作品がかかっているすごく静かな展示というのは、例えば友達と一緒に展覧会を見に来ても、ちょっと話しくかたりするんだけど、本来もっと、ギャラリーとかに来て作品を見て、みんなでこれがすごいねとかいいねとか、会話をしながら見てほしいなというものもあるので、いわゆるかちつとした美術館とはまたちょっと違う雰囲気になったかなとは思います。

○佐藤 もしかしたら、偶然向こうから見ている人と目が合ってしまうみたいなことがあり得るので。(笑)

○家成 (笑) そうですね。あるかもしれない。

○佐藤 それもまた何か楽しいのかなと。小さなハプニングがあれば面白いかなと思います。

【「はしご」からの展開】

でも、そもそもはしごというワードが出たのは、たしか最初に、ここと同じ部屋だったと思うんですけど、打合せをしたときに、こちらから多分、「ディア ストーリーズ」というか、物語とか、語るということがテーマなので、そういった場が生まれるような、何か公園のような雰囲気とか、そういうワードをお出ししたというか、話題に上がったと思うんですけども、そのときにはしごというのは出ましたよね。

○家成 そうですね。滑り台に上っていくタラップとか、ジャングルジムとか、雲梯はあまりないかもしれないですけど、何かそういうふだんまちの中にはない、体の運動みたいなものを想起するアイテムとして、はしごがいいかなと、そのときぱっと出てきて、話した記憶はありますね。

○佐藤 何か降ってきたという感じですよ。(笑)

○家成 そうですね。(笑)

○佐藤 それがデザイン化されていく中で、淡く残っているのか、はっきり残っているのかというのは結構あると思うんですけど、最初のプランを拝見したときに、めちゃくちゃはしごだねというか、はしごというアイデアがかなり全方位的に貫かれているという印象があって、すごくいい驚きでした。(笑)

○家成 (笑) いや、担当はdot architectsの宮地さんという人で、現場にも来てやっていたんですけど、最初は宮地さんは、あまりはしごっぽいものではないアイデアも出していたんですよ。それで、幾つかアイデアがあって、もうちょっとこうしよう、ああしようということを話しながら、結果、やっぱり最初のはしごに行くという。(笑)

○佐藤 (笑)

○家成 ジャッキー・チェンの映画で『プロジェクトA』だったかな、狭い路地を、はしごを横に向け

ながら自転車で走っていて、そのはしごに人が当たるみたいなシーンとか、はしごというのはやっぱり何かちょっとハプニングが起きていつも面白い。落ちたり、当たったり、立てたり、横にしたり。やっぱり面白いから、はしごでいきましょうかというのを宮地さんと話をして、今の案に至るという感じかなと思います。

○佐藤 宮地さんからは、どうしても展示空間だから壁に寄ってしまうというか、壁を立てたい気持ちとかも多分途中にあったみたいで。だけど、やっぱりはしごでいこうということを家成さんからディスカッションで言われてと言っていました。(笑)

○家成 (笑)

○佐藤 苦労を多少したような。でも、さっき壁はないと言ったんですけど、それこそ面というのは、展示台とかで水平な面があったりとか、あとはベースですね、あれは構造的にというか、安定させるためにも必要なんですけども、ボリュームとか、ちょっとどしとしたものがあったりとかで、そういう面では非常に、ともすれば線だけだとシンプルだけれども、少し単純になりすぎるようなところを、いろんな要素を組み込んでくださってと思いました。

○家成 そうですね。何かぐわっとアールで曲がっている面とかもありますし、いろんなバリエーションがつくれているかなと思います。

【繊細さを加えるための加工】

○佐藤 そうですね。あとは、会場構成を調整していく中で、すごく宮地さんとかのこだわりというのが、はしごの棒の端っこが細くなっている。あれはよく見ないと、もしかしたら来てくださった方も分からないかもしれないんですけども。全部のはしごがそうなっているわけではなくて、ある一部のところがちょっと緩やかに細くなっているみたいな。あれが、加工がね、ちょっと。(笑)

○家成 そうですね。(笑)

○佐藤 加工も、やる方は難しいし、やっぱりお金もかかってしまうみたいなこともあったりして、作る上では少しいろんな面で苦労したということがありますが、それは、宮地さんから最初に提案があったんですか。

○家成 いや、あれは、たしか僕が言ったと思うんですけど。

○佐藤 そうですか。

○家成 同じ直径の丸棒と枠の材料がとんと突き抜けているだけだと、何というか、色気がないというか、材料と材料がただとんと当たっているだけみたいになるので、やっぱりちょっとああいう先が細っていくような細工があるだけで、随分フレームが繊細に見えてくるというか、一手間かかっ

ているように見えてくるので。そこは、はしごを作る上で、何かしら一箇所はディテールというか、それはちょっとこだわったほうがいいよねという話はして。僕は取りあえず、細くするというのはどうかなと宮地さんに言っていたんですけど、それを宮地さんがやってくれて、HIGURE17-15casさんが頑張ってくれたのかと。

○佐藤 そうですね、施工会社の方が。そこはちょっと限られた時間の中で、その加工をたくさんするというのは少しハードルが高かったみたいなんですけど、それはやってくれましたし、それで実現しました。

○家成 本当にありがとうございますという感じですね。

○佐藤 でも、本当にそれだけで、全然印象が違いますよね。私も、ギャラリーの者も、はしごというか、丸棒というんでしょうか、直径が同じ丸棒だけだと、結構にぎやか過ぎるという印象にもなりかねないのかなという心配もちょっとあったんですけど、出来上がったらやっぱり、本当に小さなこだわりかもしれないですが、それによって柔らかい繊細さというものがすごく出ていて、それと加工されていない棒も混じっているわけで、それがすごくいいバランスだなということを思いました。だから、やっぱり頼んでよかったと思いましたね。(笑)

○家成 ありがとうございます。(笑)

○佐藤 いい空間になりました。

【巡回展の今後の予定】

では、この展覧会なんですけれども、アール・ブリュット2023巡回展「ディア ストーリーズ ものがたり、かたりあう」という展覧会は、先ほどお伝えしたように3会場を順次巡回して開催されるんですが、第1会場は墨田区のすみだリバーサイドホールギャラリーで9月末から10月初めで開催されて、もう終わりました、今現在、私たちの東京都渋谷公園通りギャラリーで開催されておまして、12月24日の日曜日までやっております。その後、年が明けまして2024年1月24日から2月7日まで、立川市のたましんRISURUホール、これは立川市市民会館のことなんですけれども、こちらの展示室で行われます。

それから、ちょっとdot architectsさんの什器は持つてはいけないんですけれども、出張イベントというので1日だけ、羽村市のプリモホールゆとろぎという、これは羽村市の生涯学習センターなんですけど、その展示室で、11月26日の日曜日の午後2時から3時まで、出張イベントで私とかが少しレクチャーしたり、あとは渋谷とオンラインで結んで、渋谷の会場の様子を見ていただく。あとは、鎌江一美さんという出展作家のお一人の立体作品に関しては、会場で、1点だけなんですけれど

どもご覧いただけるということになっています。

○家成 なるほど。

○佐藤 ですので、皆さん、今お話しした会場構成、そして作品をぜひ見に来てください。

【気になった作家と作品、おすすめポイント】

○家成 作品がめっちゃいいですね。

○佐藤 そうですね。どれが、何か特に。

○家成 いや、僕はもともと、富永さんの作品が家にあるんですよ。

○佐藤 そうなんですか。えー！

○家成 缶から、スイッチを入れたら目ん玉がうえうえって動く、何かグレムリンみたいなやつがあるって。(笑)

○佐藤 (笑)

○家成 それが家に置いてありますし、富永さんの存在自体は、そういう意味で前から知っていました。

○佐藤 そうですか。

○家成 今日来たら、こんな精巧なものもあるんだって思って、すごく面白かったですね。

それから、みんな面白いんですけど、山崎さんの方眼紙で描いている作品、新潟でお生まれになって、それで季節労働者として東京に行かれたのが1960年代というふうに解説にあったと思うんですけど、ちょうど最近、東京湾の埋立ての歴史を本で読んでいたもので。

○佐藤 そうですか。

○家成 あれは隅田川にすぐ土砂が堆積するので、その土を運んで別の場所に持っていかないといけないという大変な工事だったと思うんですけどね。山崎さんがそれに多分参加されていたんじゃないかなと思ったり。そして、土砂をすくい上げる船とか、すごく面白いなと思いながら見ていました。

○佐藤 ええ。

○家成 鎌江さんもいいしな。もうすごいですよね。一体化しているというか、何というか。

○佐藤 そうなんですね。鎌江さんは、つぶつぶがたくさんついているというのが一つの特徴なんですけど、顔が1つとは限らないというね。

○家成 そうなんですよ。誰でしたっけ、施設長の……

○佐藤 まさとさん。

○家成 まさとさんと鎌江さんがもう混ざり合ったような、愛情を感じる作品で、すごくいいですね。

○佐藤 そうですね。

○家成 あとは、僕は鳥が基本的に好きなので、ミルカさんの鳥の、何ていうんでしょうね、音符が緻密に描かれていて、鳥もすごく色鮮やかで、すごくいいなと思いましたし、あとは畑中さんも、あれはめっちゃ面白いですね。僕が一番好きなのは《青犬》と《青ネコ》。確かに青い犬っておらへんなと思ったんですね。(笑)

○佐藤 (笑) 確かに。

○家成 めちゃくちゃ面白いなと思いましたけどね。あとは、何か「それ」って、書いている文章の中にちょいちょい出てきたと思うんですけど。

○佐藤 何かキャッチコピーみたいな。

○家成 キャッチコピーがすごくいいんですよ。だから、いいなと思って見ていたし、僕らは建築設計をやっているので、ふだん建築の模型とかをたくさん作って、どういう建物にしようかなと検討していくんですけど、そういう意味ではhidekiさんの北仙台でしたっけ、駅の模型の手つき、あれは本当にかっこいいというか。何というんでしょうね、途中でろうみたいなのが……

○佐藤 あれはボンドなんです。

○家成 ボンドが、ぱーっとかかっていたり、いろんなマテリアルが混ざっていたり、ああいう模型が作れたら本当にいいなと思ながら。(笑)

○佐藤 (笑)

○家成 迫力あるなと思って見ていました。

○佐藤 結構信号とかが密集していたりとかね。

○家成 そうなんですよね。僕らの模型というのは、造る建物をリアルというか正確に作るのが建築模型ですけど、何かhidekiさんのやつは、もうちょっとイメージというか、伝えたいものが本当に伝わってくるという模型になっているから、hidekiさんみたいな模型で一回プレゼンしたくなりました。(笑)

○佐藤 (笑) ちょっとふだんの模型を超えた、何か。

○家成 そうですね。あとは、松本さんの旗のやつ。あれがめっちゃかわいいから、あの旗が全部実際に立っていたらすごくいいやろうなと思って。ほかの陣取りの日本地図もすばらしいですけどね。やっぱり浜名湖とか琵琶湖とかの日本にある大きい水たまりが描かれていて、それがすごく何か、くっつと浮いて見えてきて。(笑)

○佐藤 そうですね。そうかもしれない。

- 家成 何か普通ああいうのは描かなさそう。
- 佐藤 省略しそうですね。
- 家成 それがすごくいいなと思ったりして見ていました。
- 佐藤 じっくりと見てくださって、注目してくださっているような雰囲気がありました。
- 家成 すごく見応えのある展示になっていてすごいなと。あとは森崎ウインさんの音声ガイド、めっちゃくちゃいい声ですからね。(笑)
- 佐藤 (笑) ささやいてくださる、耳元で。
- 家成 耳元でささやいていただけるとい、すごくいい感じです。
- 佐藤 森崎さんも楽しんでご覧くださったので。
- 家成 そうですか。よかったです。
- 佐藤 これも3会場、立川でも聴くことができますので。ありがとうございます、いろいろ。(笑)
- 家成 いえいえ。(笑)
- 佐藤 細かくコメントしてくださって、ありがとうございました。
- 家成 ありがとうございます。